

PC-1-037 術前化学療法が著効を示した胃壁内進展食道癌に十二指腸進展胃癌を合併した一例
 今野元博, 加藤道男, 十川佳史, 酒井健一, 市川英明, 西川正康, 石丸英三郎, 保田知生, 大柳治正
 (近畿大学医学部第二外科)

術前化学療法が著効した胃癌の十二指腸進展と食道癌の胃壁内進展による広範な病変をみた一例を経験したので報告する。症例: 73歳, 男性。心窩部痛・食欲不振を主訴に来院。検査所見: 中下部食道から腹部食道にわたる全周性の高度な狭窄と, 小弯側胃壁の大部分と大弯側体中部から幽門輪にかけて, 十二指腸下行脚に及ぶ硬化像が認められた。前庭部後壁にひだの集中と白苔を伴う不正な潰瘍が存在した。画像診断の結果, 食道・十二指腸に浸潤したびまん浸潤型の高度進行胃癌と診断した。この症例に対し down staging を目的とした術前化学療法 (CDDP 70mg/m² × day 1.5-FU 700mg/m² × day 1~5/21days × 3) を施行。化学療法後の緒検査で PR を得たため切除可能と判断し胃全摘を施行した。切除標本の検索では幽門輪付近の筋層内に viable な中分化を示す腺癌組織が残存していた。また食道胃接合部には扁平上皮癌が存在したため下部食道癌と診断した。また上中部胃壁内のリンパ管内および転移リンパ節内の癌細胞も扁平上皮癌であった。胃癌・食道癌とも組織型が異なっていた両者に術前化学療法が著効を示した症例として興味深いので報告した。

PC-1-038 術前低用量 CDDP/5Fu 療法が著効した腹部大動脈リンパ節転移陽性胃癌症例の 1 例
 野本一博, 齊藤光和, 高橋博之, 齊藤文良, 井原祐治, 塚田一博
 (富山医科薬科大学第 2 外科)

【目的】胃癌に対する neoadjuvant chemotherapy (NAC) は確立されていないのが現状である。今回, 術前低用量 CDDP/5Fu 療法 (low dose FP) を施行し, 著効した胃癌症例を経験したので報告する。【症例】症例は 66 歳の男性。術前検査で, 胃体部中心に巨大な 3 型の腫瘍を認め(生検は por1), 16a2 リンパ節を含む広汎なリンパ節転移が疑われた。MUL 領域の 3 型の胃癌で, cT3cN3cP0cH0cM0, cStageIV と診断し, 術前に 5Fu 500mg/day · day 1~5 の 5 日間持続投与と, CDDP 10 mg/day, 1 時間点滴 day 1~5 を 4 週間投与する low dose FP を施行した。low dose FP 施行後, 原発巣は PR, リンパ節転移も PR と判定した。sT2sN2sP0sH0sM0, sStageIIIa の診断で, 膵脾合併胃全摘術, D 2+16 リンパ節郭清術を施行。切除標本の原発巣およびリンパ節に癌巣は見出されず, 組織学的効果は Grade3 と判定した。術後 3 年経過した現在, 再発の兆候を認めず, 外来通院中である。【結語】術前 low dose FP が著効した胃癌症例を経験した。NAC を施行するにあたり, 適切な治療法の選択とその療法に奏効する適切な患者選択が重要であると考えられた。

PC-1-039 切除不能再発胃原発 malignant GIST に対しメシル酸イマチニブ (グリベック) が著効した 1 例
 小熊英俊, 笹川 剛, 喜多村陽一, 梁取絵美子, 武市 綾, 高崎 健
 (東京女子医科大学消化器病センター外科)

(はじめに) 我々は切除不能の再発胃原発 malignant GIST に対しグリベックが著効を示した症例を経験したので報告する。(症例) 初発時 37 才, 男性。検診における上部消化管造影検査にて異常を指摘され来院した。胃体上部原発の粘膜下腫瘍と診断し, 1999 年 1 月, 噴門側胃切除術, 食道残胃間結腸間置術を施行。組織検査では αSMA (-), S100 蛋白 (-), CD34 (+), c-kit (+) であり, mitosis を認めたことから胃原発 malignant GIST と診断した。術後経過観察中の 2000 年 4 月より 2001 年 6 月までの間に腹膜転移再発, 肝転移再発を認め, 計 5 回の腫瘍摘出術を行った。2001 年 10 月, CT にて残肝腫瘍, 腹腔内腫瘍および腹部大動脈周囲の腫瘍を認め, 再発と診断するも腫瘍摘出不可能と判断した。そこで, 10 月 29 日よりグリベック 300mg/day の服用を開始。6 週後の CT 検査にて肝腫瘍および腹腔内腫瘍は壊死化, 大動脈周囲腫瘍は消失した。14 週後の CT 検査にて肝および腹腔内壊死化病変は縮小した。(考察)グリベックは今後, c-kit 陽性の再発 malignant GIST に対する第一選択治療薬となる可能性がある。

PC-1-040 胃 GIST 術後再発に対する Gleevec の効果

矢野隆嗣, 玉置久雄, 三田孝行, 大橋直樹, 松本英一, 熊本幸司
 (松阪中央総合病院外科)

【症例】2000 年 8 月より時々 nausea あり。近医を受診し, u-GIS, 胃内視鏡で胃体部小弯の SMT と診断され当科へ紹介。US, CT で, 胃体部小弯側に dumbbell 型の SMT が認められた(6×5cm, 壁外発育主体)。2000 年 12 月筋原性腫瘍の診断で, 胃局所切除を施行。摘出標本は, 体部小弯原発の弾性軟の腫瘍 (60×40×50mm) 組織学的には, 核異型を伴う紡錘型細胞が増殖, 細胞密度が高く, 分裂像も 1~4 個/1 視野と多く, GIST with low grade malignancy と診断された。2001 年 8 月(術後 8 ヶ月)に CT で 2 箇所 of 局所再発が確認された(胃小弯側, 肝門部)。再手術を行い, 先ず肝門部の再発腫瘍摘出を試みたが, 脆弱で rupture し, 吸引除去。胃小弯側腫瘍は cystic degeneration を来たし, rupture による播種促進が危惧され, 切除を断念。以後外来 follow となる。2002 年 10 月 26 日, Imatinib (STI571) 300mg/day を開始した。腹部 CT で小弯側再発巣のサイズを follow しているが, 投与開始後 4 ヶ月で, 著しい縮小が観察された (最大径 8→5.3→4.5cm/4months)。